

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	松嶋 健
論文題目	現実のユートピア—イタリアにおける精神医療の生態学的転回と制度化		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士学位申請論文は、1978年の法律制定を契機に公立精神病院を廃絶したイタリアの精神医療について、その歴史的経緯、思想的背景、そして病院に代わって生まれた地域精神保健サービスにおける利用者の日常生活やスタッフの諸実践を描いた医療人類学的研究である。</p> <p>本論文は、序章「本研究の問題構成とその文脈」と終章「精神医療の生態学的転回」に加え、本論が5章からなる。それらは、第2章「精神医療のノーマライゼーション」、第3章「精神医療改革の実践とその思想——フランコ・バザーリアを中心に」、第4章「地域で生きることを支える」、第5章「仕事としての家族、家族としての仕事」、第6章「演劇実験室のトートロジー」である。</p> <p>序章では、本論の目的、精神医療に関わる研究や医療人類学の先行研究、関連する現代思想の主要用語が吟味されている。</p> <p>第2章では、イタリアでの試みについて論じられている。1978年成立の法律180号（バザーリア法）にまで至るイタリアの精神医療の展開は、法律上で見ると、特殊な医療としての精神医療のノーマライゼーションの過程とひとまず見なすことができる。そこには精神医学と近代国家との深い関わりがあり、その際決定的な役割を担ったのが精神病院という施設であった。近代の精神医学は、最初からある特殊な環境と不可分な形で出現したわけである。そして後に1960年代から始まることになる精神医療改革運動は、この点と深く関わっていた。</p> <p>第3章では、公立精神病院の廃絶を目指す運動を主導したフランコ・バザーリアの思想やその運動が生まれた社会的背景について論じている。バザーリアは、実存が常に身体という形をとって状況づけられているという地点から思索を深めてきた精神科医であり、主体と客体を分離する認識の暴力こそ最終的に精神病院という「暴力の施設」を具体化するということを明らかにしようとした。「実践的現象学」と呼ばれるべきバザーリアの思想は、相互行為空間を規定している制度の次元を明るみに出し、所与の「現実」として現れている諸制度をずらし、組み換えることで新たな相互行為空間を開いていこうとするものだった。これがバザーリアの思想の鍵となる「脱制度化」である。この脱制度化が伴ってはじめて、単なる脱病院化にとどまらない脱施設化が生じる。それゆえ脱制度化の実践は、たとえ精神病院が廃止され地域精神保健サービスに移行したとしても終わらない。</p> <p>第4章では、地域精神保健サービスにおける参与観察やインタビューをもとに、多くの事例が提示され議論が進む。現在の地域精神保健サービスにおいても、財政的・</p>			

人間的な不足や若い世代の看護師の専門主義など、新たな施設化を生み出す要因は様々な形で出現してきており、脱病院化が達せられた現在も別の形での脱制度化が問われていることが明らかとなる。これは、施設＝制度を問題化したイタリアの精神医療改革が、精神医療を普通の医療と同じにするという意味での精神医療のノーマライゼーションとは似て非なるものなのである。精神医学の知の制度とセットになった精神病院という施設を「否定」し、それとは別の新たな場所を開いていくことは、単に病院の中で行われていた医療を病院の外の地域で行うというのとは異なる。それは、病院を廃止しようとするだけでなく、「所与」として立ち現れている「病気」そのものに焦点を当て、それを客体として治療しようとするのではなく、病気を括弧に入れそれぞれの人の持つ生きる力に注目する試みである。地域精神保健サービスで働くスタッフの視点から考えると、こうした動きはそれぞれの利用者の生きる過程に寄り添いながら、参照点となって彼らの周囲に新たな「地域」を創出しようとする実践となる。イタリア語の「地域」では、それぞれの人々が様々な問題を抱えながらも、生活環境に必要な資源を探索・利用し、各々独自のやり方を編み出しながら自身の環境（地域）を創出して世界と折り合いをつけていく。本論文では、こうした過程を「生態学的転回」と呼んでいる。

第5章では、地域精神保健サービスの利用者（患者）が生活しているカーサ・ファミリア（グループホーム）の参与観察やインタビューをもとに、彼らが他者とともに生きる姿や働く姿を考察している。インタビューは主として詳細なライフ・ストーリーからなる。一方に堅固な制度があり、他方に生きられた経験を生きる個人がいるという図式を批判し、制度が絶えざる制度化と脱制度化の過程としてあること、同時に、制度は身体を部品として作動し、身体もまた制度を身につけることで行為しうることを明らかにしている。

第6章では、演劇実験室というプロジェクトが論じられている。これは、演者（患者）のセラピーのために企画されたのではなく、それとは関係なく専門の劇団を作ることを目指して始められた。ここでは、申請者自身がこの実験室への参加を許され、種々の身体とレーニングを積み重ねた経験に基づいて、行為する身体と制度化の相互関係について論じている。

終章では、これまでの議論をまとめ、地域精神保健サービスの限界について触れ、人間と環境との関係を「過程」という視点から論じることの意義を述べている。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、20世紀末に公立精神病院を廃絶したイタリアの精神医療について、その歴史的経緯、改革の実践およびその思想的背景、現在の地域精神保健サービスにおける利用者の日常生活やスタッフの諸実践を描いた医療人類学的研究の成果である。評価すべき点は以下の3点にある。それらは、1) 対象の独自性、2) 学際的な視野、3) 民族誌記述の可能性である。以下、簡単に説明していきたい。

1) 対象の独自性：文化人類学（社会人類学、民族学）は、ヨーロッパにとっての最大の他者のひとつである「未開人」を対象に取り扱う学問として19世紀に誕生した。当初は、伝道師や植民地政府の官僚、そして探検家による報告に基づき人類史の再構築を目指していたが、20世紀になると文化人類学者自身が文字をもたない人々の住む「未開」の地をフィールドとして選定し、そこで長期滞在して実証的調査（フィールドワーク）を行うことになる。後にフィールドは無文字社会から中国やインド、日本などを含む文明（文字社会）へと拡大していくが、ヨーロッパが非ヨーロッパをフィールドワークするという非対称性は長らく変わらなかった。こうした状況で、少数ではあるが、非ヨーロッパ人によるヨーロッパ地域の文化人類学的研究も増えつつある。しかし、日本人の研究に限ればその多くが、農村社会やヨーロッパに定着した移民社会などで、ヨーロッパ社会の中心制度の研究はほとんどなされていなかった。この意味で、本論文は、イタリアの精神医療制度を取り扱っているという点できわめて価値の高いものとして評価できる。また、公立精神病院廃絶後も、従来の研究では医療関係者の態度の考察に留まっていたが、本論文では、精神病患者として扱われてきた人々に焦点を当てて、彼らの集合生活の実態を描くことで、より実証的な資料の提示と分析を試みている。本研究は、ヨーロッパ（イタリア社会）についての良質な医療人類学的研究として位置づけることができる。

2) 学際的な視野：本論文を特徴づけているのは、きわめて行き届いた議論である。そこで考察される文献は文化人類学や隣接科学である社会学や地域研究の分野にとどまっていない。従来の文化人類学の学術的な地平をはるかにこえる議論を試みているのである。著者はまず、序章で医療人類学のレビューを行っている。しかし、それだけにとどまらず、現在の精神医療を考えるうえで無視できないフーコーやレイン、そしてイタリアの精神医療制度に大きな影響を与えてきたバザーリアの思想について、文化人類学においてはきわめて異例と思われるほど踏み込んだ考察をしている。また、制度化についてはメルロ＝ポンティの議論に依拠しつつ、分析を進めている。

人類学だけでなく、精神医療や精神分析、そして哲学・思想における関連著作への言及は、一見散漫になりがちだが、そうならないのは、目的をはっきり見定めたきわめて強靱な思索の結果といえることができる。他方で、その思索は、空理空論にならないように一次資料によってつねに制御されている。そうした思索と資料との往復が端的にみられるのが、精神障害者の劇団を打ちたてようとするプロジェクトについて論じている第6章「演劇実験室のトートロジー」である。ここで申請者は、事実についての詳細なデータを提示した後、演劇集団の試みとは一体何だったのか、と問いかける。その際言及されるのがニーチェやグロトフスキーであった。そして、演劇で問題視されているのは受動でも能動でもない中動相という様相であると主張する。

3) 民族誌記述の可能性

本論文は、上記の2点からも明らかなように、通常文化人類学の枠を越えたきわめて野心的なものである。しかし、このような脱人類学の試みが、そのまま人類学の否定を意味するわけではない。むしろ、本論文がこれからの文化人類学の方向を示唆しているとさえ考えられるのである。

その理由は、本論文で採用されている記述、すなわち民族誌的記述の可能性である。とくに注目したいのが、第4章「地域で生きることを支える」と第5章「仕事としての家族、家族としての仕事」である。そこでは、バザーリアら、運動の背景となった思想や統計データに依拠することなく、著者自身による当事者への膨大な数のインタビューや観察資料が詳細に検討されている。また、当事者には医療に携わる者だけでなく、多くの利用者が含まれている。この意味で、本論文の議論はきわめて実証的であり、医療人類学の分野にとどまらずイタリアの精神医療の実態を多角的な方面から明らかにしているという点で評価できる。

最後に1点だけ問題点を挙げておこう。本論文には家族や宗教、農民などについてのテーマが繰り返し現れてくるにもかかわらず、それらのテーマを関連づけてイタリア社会とは何かといった文化的・社会的特性についての考察を行っていない。こうした問題点があるにもかかわらず、本論文は理論的にも独創性に満ちた第一級の学術論文であるという点で審査員の意見が一致した。

以上を総合して本論文は博士（人間・環境学）の学位に値するものと判断される。また、平成24年5月30日に論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降